



高校生は、まずこのキャンパスモールに立ち、緑あふれる壮大なキャンパスの美しさに驚くという。石畳には、科学の歴史が時系列順に刻み込んである。

エントランス近くにあり、アクセスの良い「研究棟」。研究室のほか、各階に学生同士や教員がコミュニケーションを取れる専用ラウンジを設けた。



新世紀のキャンパス
Campus of New Century

東京理科大学 葛飾キャンパス

JR金町駅から徒歩8分、キャンパスの玄関口にそびえる講義棟。大小約50室の講義室を配置。



左手のエントランスから右手最奥の図書館まで、敷地内をつなぐ「キャンパスモール」を中心に、各棟が整然と並ぶ。



キャンパスのシンボルともいえる「図書館」。ガーデンラウンジやカフェテリアも併設された心地よい空間を地域にも開放。1・2Fをつなぐスキップフロアに、本棚と自習スペースを配置し、本に包まれた空間を演出。



「第1・第2実験棟」は、高い階高が必要な実験や、振動が生じる実験など、特殊な要件にも対応できる。



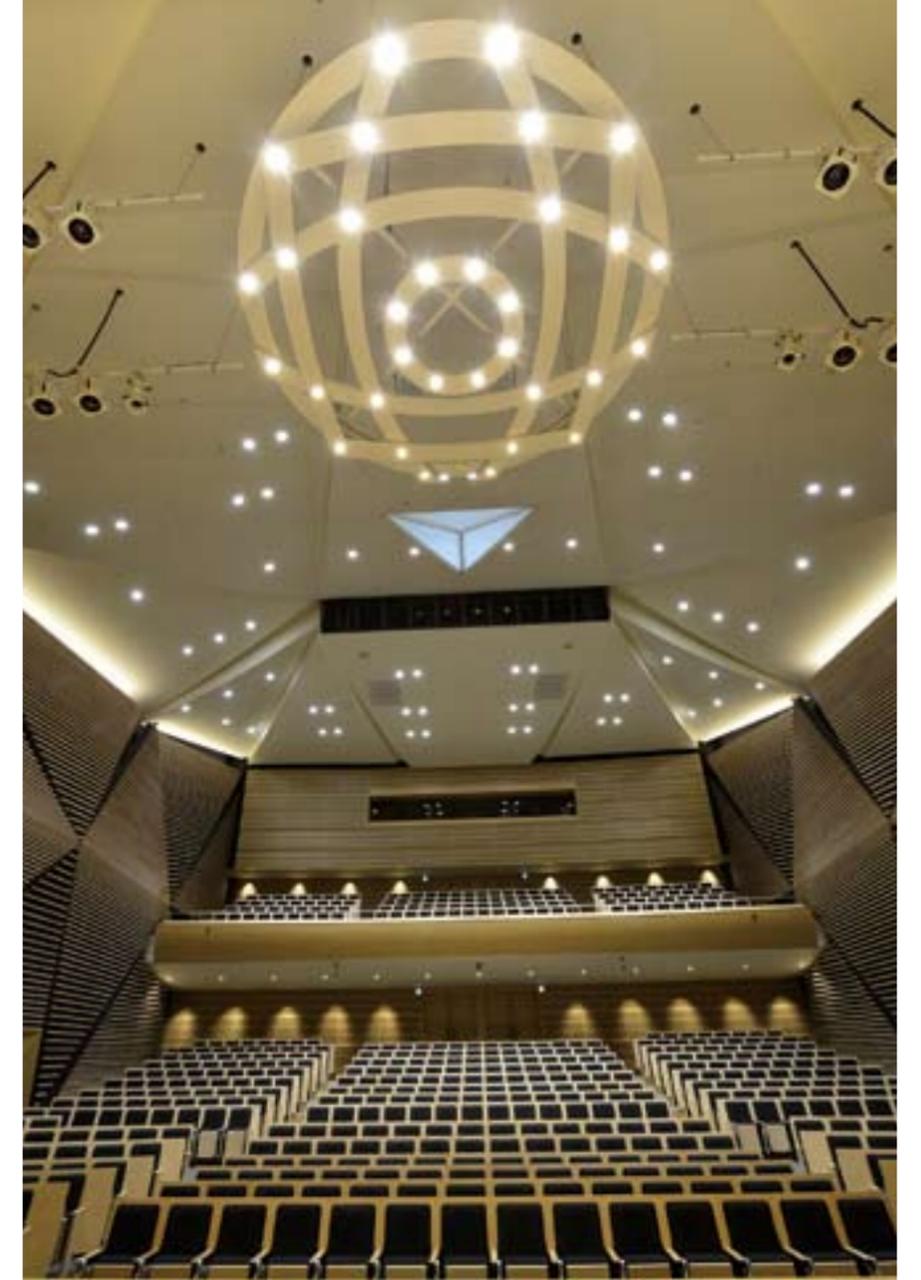
キャンパスモールの緑を内部に取り込む開放的な学生食堂。1Fにカフェテリア(500席)、2Fにフードコート(500席)を備える。

東京理科大学は、神楽坂キャンパスの校地・校舎狭隘問題を解決するため、2013年4月に「葛飾キャンパス」を開設した。3万㎡の広大な敷地内には、研究棟、講義棟、管理棟、図書館、第1・第2実験棟、体育館など7棟の校舎が機能別に配置されたキャンパスが誕生した。

葛飾キャンパス開設に伴い、大学のキャンパスは5つとなった。創設時からある神楽坂キャンパス(新宿区)は、JRと地下鉄4本が乗り入れるアクセスの良さを生かした“都心型キャンパス”。主に理学部の学生を収容し、2016年には埼玉県久喜キャンパスから経営学部を移転する予定だ。大規模な研究施設を必要としない同学部は都心に適しており、文系・理系の学生が初めて同じキャンパスで過ごすシナジー効果を試す狙いもある。次に、理工学部と薬学部のキャンパスである野田キャンパス(千葉県)は、葛飾よりも広い敷地を持つので、様々な研究施設を備えた“リサーチパーク型キャンパス”だ。

そして今回紹介する葛飾キャンパスは、塀や柵を設けず、周囲の公園と融合し地域に開かれた“学園パーク型キャンパス”を謳っている。主に神楽坂キャンパスの工学部と、野田キャンパスの基礎工学部を移転した、工学系中心のキャンパスだ。

主な施設を見ると、地上11F建ての研究棟には、研究機能の拠点として、4学部9学科の研究室、実験室、ゼミ室、入試センターを配置。地上7F建ての講義棟には、30～260人収容の教室やコンピュータ室を備えた。地上6F建ての管理棟には、1～2Fに食堂、3～6Fに事務室を配置。地上4F建ての第1実験棟、



学会、講演会、音楽演奏に対応可能な「大ホール」は同大学初。約600人収容で、国内外の学会などを行うことができる。

地上2F建ての第2実験棟には、各学科が求める特殊な要件を満たす実験施設を集めた。神楽坂の敷地面積では実現できなかった専門棟だ。キャンパスモールの最奥にそびえる地上5F建ての図書館には、1～2Fに地域に開かれた図書館、3～4Fに600人収容の大ホールを備えた。

教育・研究環境を整えたことで、学生が快適かつ効率的にキャンパスライフを送ることができている。オープンキャンパスに訪れた高校生も、見学

時に棟が機能別に分かれているので、将来自分が学ぶ施設を理解しやすくなったという。

開設前から、葛飾区と密な連携を取ってきたが、産学連携の中心部署「科学技術交流センター」のほか、研究棟に企業の入居を想定した「インキュベーションルーム」で、さらに連携を推進する。既に葛飾区内の企業との共同研究第1号が誕生。地域発展にも一層貢献していく考えだ。

(本紙 能地泰代)